KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
Kodak LICENSED PRODUCT

門へ遠 13
1.459
4

怪談信仰物語 巻四

三列八名郡の伏乃死灵

并義背理不知其悪者時亡ることを怪しむ

こゝに出ふ伏乃ふ古ふ山者伏乃者と云て二百余
と知れし器量豪ら優義みなく武士道にふ
こおのづ遊義こゝにくんあくまて別みなく仁愛
ふくゝ文武修ふりうる士ありひ人ぬく猛を好き勇往
乃いるゝ弱ゝ弱ゝ山和人ゝ弱ゝ弱ゝ陽と中むけ
ふゝ伏乃ゝゝ来四ゝ弓ふうふけ矢間おしくゝ
ふり終る何ひゆけゝ免ゝふゝみるの不ゝも浮ず

秋の日山寺に籠て風もやみふし山かげも暮かゝるに
まだ帰りもやらで衣紋ひきくろひ御経おさむる袖
背ちらし始めまだ道をいそぐ所に折から強気なる
こゝに追剥あふれて来ると見るくそのまゝ跡をんと
そこら逃ひありきしが宝か渡して彼の太刀
おそろしさに山伏一人来りかゝる追ひとまりて
行きがゝりけんとまづきあつくる待の太刀よ
やすけるを彼の山伏かしてくそうするところ
まんまと彼の太刀を取て行家さる事なるべき
まづ帰りして来たるに彼へとのぼる時分

づきそのまゝ帰つまじきなれけるりけりべしと云
山伏さしおいけるもわらかるもとお封してうり文
くりそくみちてりえてぎのまゝを借りて人まいらせ
けるものとくめまいる行人の頼れくも川おろし
ちかりきりくありくてめて彼の太刀おそろしひ
そくわたくもあまとおれ見え帰りしまふるまふ
くるに待ちせうちらそろへ印のまゝ借へ帰りあまき
さて月もくまてかくびれとおれくて名まんしまうる
見るのかどもまくこれあれぞかもいそぎ申也
と祈んてまてかくまゝ山伏着をそれげ帰しせん

やくそくわりなくでもけるものかなしうけるか
のるはるさきまいつふるさきふやとゆるかす
えぶるぶきんぢどうおもうらくさずと其
るりくさきとのせくゆるとふるるやくさき
るるくすう移とりどうるせき白眼つけ侍若
人さのるるこそ結のたつねくたれるる必後
法法華でおくさんんんさ玉荒神る秋親音
ふくさくびるる矣神るうけるるず梨うかりくるる
まれる仏行せるるりるる士其とるるそれ
伝湯殿るるてりくるる御道て秋とるれ

るものやあるべきおるるりかくるる叶るるそれ法華
みるるるるるおりずれおのを見ふるのるせてりせる
さんいくふくとせあかくるる仏のるるもひいるを侍の
下るるる事にるる受法とかずさかのるかるてのら
きくこえおるりア屋りにるるるとるるせとるるのる
るるるるくるるるあゆみるせる仏いりくどやくと
みる結でも弟るひくくも就がけるるる乃るるず
いでくこ時云の月とえさせんさけかとくるるる
おるる陸殺るの名えるるるがるどゆを中をるどりてる法
がりどあるるるるるるりるどるるるあるくも

又おそろしきは佐の太郎うちわらひ正体は不奇特(こざく)ほど
汝が邪法(じやほう)も正法をもつて正(ただ)さんは汝が(うんど)はかりいふで
たゞ其身を抜(ぬく)手(て)もみせず金作の首(くび)討落(うちおと)せし死(し)
骸(がい)をたつきず首は佐の太郎と白眼(にらみ)付(つけ)ほどしみ
あげしうめくその首は打捨しといひたる
咎しる士を迄(まで)是(これ)と見くらべ夫(おつと)あざあてまりふうち
その亡骸を死(し)骸(がい)とけりつ士たきとのりゆく
までもなれ立さうひとあゆみすさの人さん云
やう汝(うんど)おそろしけるすちときに掛人とおやめんとむこ
仏まあらば〇ともに是非雑兵(ざふ)に去ほどはなる奴原(やつばら)

此方(こなた)もとゆるこそまふしけしあらがひも汝が害(がい)よく出会ふべ
うしは前後(ぜんご)難(なん)もおもはず汝が太刀見遁し惜しきはなれ
まはしくべしまれて御本尊(ごほんぞん)の御目(つまり)見る佐の太郎
とらへその太刀汝が身(み)を乞ひ難義(なんぎ)かゝるをあつる道
といふてある士ありふおもふ御様のおきゝ(うし)士とてかく
ともども憂(ゆう)く魂(こん)魄(ぱく)申しまで霊(れい)の後(りく)念(ねん)しきと伊せん
あるべし我を御仏前(ごぶつぜん)の出(と)頭(ごう)せしたゞ内(さつ)妙(しん)の菩提(つ)弔(く)
しかがらあの正体との是(ぜ)非ゆかせしも年わ正体を
ものたてのが道(みち)は待(き)ちろうあの侍(さむらひ)になかにを守(まも)
読(ど)らんを汝がしめす往(まつ)せんとく我(この)むろりと去わく

ト云のうへあのこまをとんでこかくをたん法
こまは往還とかうまちふくはまを行かもんてまち
まくおしらゆんうまがんつしさうひてんほうの仙と
あんもおそろしくんりうぎをれとうてうろう
はゆうしわそうとうてをとをて使うこぞこま
へこんおうふづを行うゆあと磐りんがしも氣づふ
てふうまゆ仙ぐれこまのうあをぐうまん 仏ふし
ゆうくんと言るのなりれとあをうをてるをもてろ
うちうけくりわうふ法ぐてをろ下りるまの海
し祝ぐ仙へ法まてを言ろ刻とをてうあぞんうるぐ

をてをてこのへうんををふ法のうるが仙てをうんとうれを
ふへるあ仙のこのもをうまりあをを文ろを仙をか
まじをくすうを変をてえんのんをり火かすふ
法ぐんをるをを言くかげんをすを行をんうげん
てをうのこのあうすをうをんををあうてみ
をうををりを火うげをのあを至るふ系を仙の
ををも法をうを仙てを法を行のをうををををみ
をうを大うを仙人をるが恐をををくづをををかも
ふをれぞ夢ふの月をあてをんだおをわんるををひく
我ぐ夜のこのと摩仏のぐう月も言をの孫うる

かくいへば平治はんかうじあをとりし火をともしけるにた
てしおきしうへに伴をいはれたる角ずきんしく佐
兵衛が枕もとにちかく見れば同じくつゝみたるもおぼえあれど
伴の丈右衛門はそのかたに行くもおもしろげにゆゝしくおかれば
其頃よりくまちて平伴をこくへうかれ伴の丈右衛門を
殺のごとく殺かゝりてもむ根をせんとしけるに雨の
降りて降りまぜ出ずる伴の丈右衛妻にいひけるに
去りしよし此内伴の方と二人のものとかくの子分にて殺す
悪人これにてむかしよりあったのを今宵ころしくもやらず
殺さんとえうかれを妻女にもちくきくいへんとおもて

のく者なりつまみをれたる様みてよく伴の丈右衛門
殺されたるは紅ひ平伴が角の安うへもいのちをもとめ
伴とえがくり伴の丈右衛門をおさめもやくてあらしれ
うちて安兵衛もとくそのへりんとかくみるをまさん
おもひは伴の悟がれもえしなれど横しく妻女と共
悪者のためにも此伴をとらへ殺人して二人
づ婦は打たれる妻の父を同じ中田村つま殺
まて神仏殺してあれば妻は二人の殺きと供ひ
わしく御びん浪者もいつくすいつまとむてゆるか
きりられさそのへりんも行りとそひくいてありきし

ねはあまりなる人のうるとかかるとてもうらく
ものうしはつるさぐくうかまし初仕と止め
るれもの後ぐられを行きも雪乳のくるれい浮
義をくて今者を仏しての化物とし掛
んやどいひあるこの人逢るいつぐもやを
いづまあ入と結めしまを来るうらう
ぬかしとるをめくんく一回めさつを知付
るんとさだるらしこうてはるせ記けを
あるまをしのるれをかくんく後分
らく後あるぐカと掛くかるふのるふ仕

ぐるるもるくてあるるめくも無とめ
てゆるるかう家中の後をあ毎に住りてうう
るんくみるんるあとけるあの方を故
てよもるぐかしく行を年るるるるを
く死奥を立も比るれをくるるまし川四
るるかあるくぶ仏ひかるくく後
しまくか持るぐしるんと後るるとの方ま
るふゆるるくるくるくるくるくへ
るんの家のるくつるきるひるぐ仕のるる更
るるぐるるかる家に家仏もしひ

所くすくしもあるくる氣こゝ臣の清こゝ人も
弘こゝどゝゝせけあってきめくこん軍藏のこゝふゝん
りくこゝ義右衛門と述く妻よこゝあるし清こゝ背敵
くこゝゆゝんこゝけこゝ仕ゆこゝて夫婦こゝあるこゝの
こゝの忠こゝこゝお母こゝたこゝこゝ孝こゝしこゝゆこゝ仕ひ
ていこゝくこゝ孝こゝこゝこゝこゝ嬰兒のごゝく変化
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ世のゆこゝも孤こゝうこゝこゝ仕こゝ孤
ゆこゝくこゝ世こゝ変こゝ祖父母又母こゝもこゝこゝこゝゆこゝ
こゝくこゝ出仕こゝこゝ父乃こゝ祠こゝこゝこゝ百こゝこゝこゝれ
こゝこゝこゝて孝こゝ孝こゝゆこゝくこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

いこゝくこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
軍藏こゝ勿こゝ永こゝ義こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
母こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

なしゝおく迄まで此侍佐々細くらんと
いさぎよくいふてくれしも志あつく止めて母ハ女心の
やるせなさもくるし恥かしくかなしくていふて印
押と紋をやるをうけすかして侍の云ふやうにハ我
高く印して死骸も残りけれども侍女ハ是を
みて刀とりあげてわが身をさしつらぬきておしらぬ
いさぎよきいさぎよく次第天竺に斬信を
いふみ摩伽國にて世に名をきめて趙の何某ハ盃
笠小十八年でふれてふ家の文字を似て人の
御門と呼まし皆悪勒汚き悪業の

さりとれのみてたすけさまゐらせて及ぶところや
いざ詠んとてこゝろふかふかくもいひ果たすまく来
くるふまゝていつわり侍のちからを耳に入おしく涙を
ながれの女侍女のまつしぶふく首ねぢ切らんと
するわれし侍女ハ枕にありし刀をまくらとけるみづから
心侍まぐるみあしかれきのへりんちてゆう至ち
刀とわりて切らしい悟しこゝろぞれ死去卯
何条悴に呪ておんやあま己が邪法の我悟
小われくとくるもさいさ次郎とのこゝろさすの人
天まづ手とかつて汝が悪逆と罵しりふ太刀と

まことゆへぞ親族が道へ落入り悪趣に迷ひ我
と終らんを悲みすし幼弱の身に紫檀と勝さ
んとは無へ至極の事なりとたゞ涙にくれ居る
ところを弥陀の申子遍師とせらるゝ是非と
なげきかなしみて嫡と曽孫を母を天すらふんじ
おもひて来るまゝ人ともに此ゆゑと申されも来り
きゝわけしもそこくかくのごとく是非の人とやりて
ませんにちうしろのよき人あまたもいくらたれば女のことかひ
なるにつねに縁者けるも限りなくみを日と経く
かなしみけれも首ふ後のことをおらせく行脚

つきろうとなるべくはおつくだ元のことなるをしひけ
ふるも孝ゆへにとひられども甲斐なし首
ものゝ人行ちどもそれども継ふなりぬ祖父
に向ひ又父がかなしみいけんとゝくしげなきくまる
がちふいてゐ止て子はゆるさずかくて一とせ余り
たりてはなくふきるゝさびしく漸々又行
へ帰り来りて父を後ゐ衛に向ひおろかに此由を
死夫もまたとさくども行ゐかく行脚づきくる
またと身の御勝さひきれど死夫まうしくみ云
つくもあらずひとくみゝあつくろうきすのを定

かくて四郎兵衛九年めに初秋の比よりふと二三ヶ月程
とをく也衣のをもゆるすもあらじ又堂ちるとよくぞ
我は来るぬるすもあらじが其の余る所りてまた
来る代信のたいが新そともあやしみつゝてろ比代和
たまさかくろんかどつのく行をまた行きゆめみる其まで
かくく主もあるく中りめとで兵兵衛をつらく来
入ゐて旅を兼る浮者もさをれでく呼ぶて付曾
大きの輸年全彼の為の進し勤仕と乳ひて也
勤し因役中と根き参拾年の余の年く行り紙う
色るりのと和く丸ありまたし引出来き人を

まさりゆくるゝ信のたいに物ひるれ来る御とを
みうけしるす殿の行兵衛へ迎えのもすにもおなじ
我の程も也也此代の中で身紀たるゝながら年を
我なり多分をに拾年九年の間勤仕せずる事も
てう加る乞るすなをると文兵衛は深志をあく代役と
ゆ勤めさせゆるく病気書きけしてかる金銀
は後ともに是は御慶悦いの拾まいくてもあるべく
ぎうりなれたすゞ紀ろくも行ろうで九年が一毛あまと
なお及也て兵衛は志まいとて九年が生紀物成と十余
人のお番のくへきて乞まて乞れまくて人とも中くも

ぞくしておもしろきものとおもひて過け
まれ十余人のおなじもの山のとゆくに各文納たて
酒くまをあつらへすきうしと感じあひうらうん典
るをいとゝきこゝろみて音祝ひうれる人の縁去
けるの人のあり給へ

長慶寺百川和尚程く吾乃年
短歌行に曰酒に對くに當ふ新人で人生いくば
で陶淵明の多のごとく憂思忘を能て何と以ら
慰とあるん唯枯屋方寸と人でいまし江都海門

ふもとにある家乃ちるあるの住寺と百川
和尚とを面ふちびまれたる国ん殊に程まを
遠し頭皆黄乃みに更に会ちたる住寺
ちれを生殊にしば住ふのむきちと行くを
あつも清行て住と吾合ふふ山あるいづこ
りて者れるもはのれ旅の毒ふ所ふまゆて
殊つれる体とうるれ山安ふ国石ふ
れ来たたれいるわど住とまんまび殊まと
ふとを和尚ふもしくしげる人住ふお許を御来の
はら伊藤玉行紀とふくしりふ乗助ふ巳

百性ものせる日にあらはとてまつりて
ほとあるまてまいりまとて大きめるかうほとたく
ていでしまくらうとをおしばしまくしてう藤うら
ちちひしらかほ藤くうえをしまうしう多
うかうぐまを名と行くく和高といつでしかくれし
うにはあうたえいつ目あくうふうまほとうる士首
山人もゆのうほ者ものてせちほへゆめはけ
あふううつせあくかもを盃をうをせずふけさ事ふ
者まくして虎美をたくばり勝のうほうしが
因氣おあらんくうかやはは高くいて入流くてわ

無て行ふたりが或はほくかちくうれをは高
もうを白い後ぬくてあくをしふ悲くあるくしく行乃
ほ生せくうふ去上甲しうて日もかくつけいほ
うかいるうしてゆんうをくが和高くひうた
多年者合とつるもまふの体和とうをすほ
まるをる一今と作くくうの甲しはうくえ生
うをんくうくを和面とおうほ石年る中もをい無
あくのうくんいてくうめくを日とけてあくを
ほあをくくをくもまん和るハ月まあ東ものを
うかんくあ ぬを ほかもるんくをくれ 社

もろくそうふめるれを法しかのくをかくこちく人
入るくやうくうるうるうふ神あもるく月を尊
あ人二多聖ものか古人も今人も高名のあ[illegible]
おうしかしと指ちくもくあ終するふ指をうう大
そうる指ちる方尊二ツすいもやうめさるあまる潤
へ指ものか二人の中へ寄へ指と二人しくが秀
まり指のかくみとおわれ拍拍と二あるくく盤と
月くくるべ寄くらくく指をへ入るみを知高のうを
教人の給仕のと人ませんもしうう指も書
を月見て年まんとるつあくそひれてこそか

くふけるくひ指りしをを名つけく指く君と号し
指くをたるつをてひざうめせて法く至拍教
方拍指もも波あげく教と指のる方高
月をくるるくさくく庭乃波みを教をみるる陽
陽乃江もうくやあんとそ東半上二指波か
くれを和高信と呼くく今二指をてをあめを心
ゆくく又二指をちうてかがみあめを支りをけ
あくるりくて又くみうを日入東も
かのくとけ指も月くめく付とをすが乃
波くを年をまでふをどめく強うを体

みんさゆ先ゆれて松こひしけいの〇うめ白いぶ
しも強くるる氣色もみくよりてかすみて春衣
も著して笠と中とをふ仏おへり方のごく花
乃肩経をそせんるるん山ほ〇冬いるるぶ枝
いとまくしし作りめるが方ふ山るみとかくるさ

慶應義塾図書館

怪談伽童巻四終